鬼師の世界

―黒地：山本鬼瓦系（3）- 1―

高　原　　隆

「鬼師の世界」を追いかけて来たが、気が付いたことが一つある。鬼板屋と呼ばれる仕事場を持つ稼業とそこで働く人との関係である。稼業としての鬼板屋が大きくなればなるほど、親方とそこで働く職人の分離が大きくなることは事実である。もともとは鬼板屋を興した親方とその弟子である職人という形が基本である。この基本を維持している鬼板屋の場合は問題はない。しかし、鬼板屋が経営規模を拡大させていくと、親方が社長になり、職人が社員になるケースも出てくる。つまり、本来なら親方としての社長が仕事場で鬼を作るはずのものが、作らなくなり、経営に専念してしまう。「鬼師の世界」を調査していたのはいいが、鬼板屋で直接会って話をするのは、鬼板屋の代表である親方ないし社長である場合も多々あり、その場合には鬼を作る現場を担っている職人の姿が消えてしまうことに気が付いたのである。

理想としては親方もその職人もすべて調べることが必要となる。しかし、現実は鬼板屋で働く職人の数は多く、すべてを網羅することは不可能とは言わないまでも、大変な作業となり、この『鬼師の世界』では理想の形はとっていない。また長い調査に及んだため、世代交代ないしその他の理由に伴う親方および職人の移り変わりもあり、現実の変化を調査でもって確実に補足していくことも難しさを通り越し、不可能であることを実感している。

こうした事情を理解したうえで、ここでは「鬼師の世界」に表れにくい職人の姿を一部ではあるが、できる限り事実に基づいて描いてみたい。対象となる鬼板屋は山本鬼瓦である。すでに山本鬼瓦自体は調査を終えている。（高原2005、2006）　いわゆる「親方と職人」が分離した大型の鬼板屋であり、「社長と社員」の形に移行している。しかし、多くの手作りのできる職人を抱えており、独特な経営をしている企業と言えよう。2016年10月4日現在で、山本鬼瓦には8人の鬼師がいる。ベテランから全くの新人までを含めた数である。今回取り上げる職人はそのうちの二人である。一人が伊勢湾台風以降(1959)に始まった現在の山本鬼瓦で中心的な仕事をしてきた職人である杉浦義照に焦点を当てる。もう一人が山本鬼瓦の若手鬼師を牽引する中堅、日栄富夫をここでは紹介したい。鬼瓦職人としての鬼師の姿を二人の鬼師を通して描いていく。

杉浦義照

昭和13年2月11日に杉浦義照は高浜、向山の近くに生まれている。父は早く亡くなり、母親の手で育てられ小さい頃は難儀をしたという。家は農家で、小学生になるころから家の手伝いを始めている。

農家だったもんだから、手伝いをやって…。昔はみんなやっとったもんな…。

ちょうど大東亜戦争（1941 － 1945）が終わった頃、母親について働き始めたことになる。義照はその頃のことを話してくれた。

あの頃はねー、戦争があったもんだで…。あのー、（昭和）19年、20年ね。戦争がね。食べるもんなんかあらへんもんね。農業やっとってよかったわね。ほんで、だんだん世がようなってきただ。

ほりゃまあ、始終お袋はねー、わしを引っ張っちゃってちゃー、農業だもんでねー。女じゃやれへんもんだ…。自分は手伝いをやって…。

戦争がすんでからやで、3年か4年…。みんな食うもんなんかなくてねー。まあ、あんた、みんな、こうやって手合して、「お願いします」って…。ほれが、一緒になってって、これが農家のうちに回って来よったもんだ。食糧をもらいに。

ほんのわずかな銭でね。あのー、まあ、こういうことがあったで、あげたりね。ほういうことをやっとったな。自分は。ほれで、子供が、あんた、親が角（かど）におって、子供が入って来て…。ほれで、秋になったら芋があるだ。それで、もらって、「ありがとう」って言って…。親がついとるだ。

そういう時代もあったなあ…。うん。その頃は、コソ…、泥棒が多くてね…。よう農家へ泥棒が入ったねー。泥棒ったって食べるもんだな。持ってくだな。米とか、ほういうもの、盗んだりねー。あの時代は…、皆、変な時代だった。

ほりゃー、生きるのに一生懸命やったな。

一方、義照の父親は早く亡くなっており、記憶にはないという。ところが記憶にはないはずの父親の父親像はしっかりと義照の心に残っているのであった。

あのー、儂の、タネ（種）が、昔…、絵を描くような人間だもんだ。絵で、絵で、飯を食っとったもんで。親が…。わしを作った人間が。

つまり、義照の家には亡くなった父が残していった幾つかの絵があったのである。

うん、まあ…、絵はあるよ。うん、それは家（うち）にあるけんど…、まあ、ほういう風やね。ほだで、こういうー、ものを作っていくことはねえ…。ね、やっぱし、嫌いな人もあるし…。（笑）

血筋っていうのがある…。作ってる時は、まあ…。嫌いな人はあかんわねー。

どんな絵を父親は描いていたのかとたずねてみた。

ほりゃ、まあ、あれだね。普通の…、あれだね、風景とか…、まあ、いろいろだね。ああいう絵を描いとったけども…。

「見たことがあるのか」と聞くと、はっきりと否定するのであった。

見とらん。ほりゃー、見とらん。全然見てない。残ったもんだわ…。

こういった環境に育った義照がなぜ鬼師の世界へ入って行ったのかたずねてみた。もと

もとは農家の息子である。

うん、高浜…、とかそこらへん。んで、そこでねえ、私がちびのころはねー、まあ、時代やな。変わってるのも、農業をやってるもんで、うちは。ええ。ほいで、こういうところへねえ、「腕に職をつける」…、という、そういう言葉があっただ。当時。ほんで、こういうところ（鬼師の世界）入って…。

誰か勧めた人があったのかと気になって義照に聞いてみた。返ってきた答えは次のとおりである。

親というより…、まあ、わしの家の近辺がね、そういう人（鬼師）が割に多かっただ。あの時代は、うん。「腕に職をつける」ってって。で、あれだねえ。あの時代はみんなほーだったね。まあ、だいたい、「職をつければ飯の食い損ないもない」って。ほういう…、変な言葉があっただ、昔は。

うん、農業をやりながらね。ほれでこういうところ入ったっていう…。

義照は中学を終えた昭和27年に鬼師の世界へ入っている。14歳の頃の出来事であった。

ここへ（山本鬼瓦）来るようになってからでも、あれだね、農業やって、ほれで、また、農業済むと、瓦やって…。

つまり、「腕に職をつける」という気風が当時の義照が育った土地には色濃くあり、さらに実際に鬼師が近所に多く働いていたのであった。なぜ選んだ職が鬼師なのかを義照が話している。

そりゃまあ、うちのね、すぐ近くの人が…。鬼板師っていうのが、昔多かっただ。その近辺がね。ほで、さっき言ったように、あのー、「腕に職をつける」と、ね。手に職をつけるということで入っただわな。うん。ほんで、小僧…、「小僧」って言ったら変だけんども、昔の言葉じゃ小僧って言うでね。見習いで入って…。

義照はさらに鬼師に導いてくれた鬼師との出会いについて語るのであった。

ほやねー、うちのねー、あのー、新家（あらや）のー、あれがのー、うー、あれだねー。うちのがね…。類次さんと友達だったのよ。うん。ほれで、俺の名前を言って、ほんで、あの人も鬼板師やっとったわ…。

ほれでねー、「やれや」と…。「うん、ええよ」ってって…。「おらあー、何か作るんが好きだ」って言って…。ほれで、あれだなあ、入ったってことだな。ほいだけのことだ。うん、うん、うん…。

ここに出てきた類次という鬼師が、義照を鬼師の世界へ導いていった人であった。石川類次といい、その当時、山本福光という鬼板屋で鬼師をしていたのである。（高原2005）鬼板屋の外で、義照は偶然にもなんと生涯の師となる鬼師、石川類次と出会ったのである。それを後押ししたのは母親であった。

まあ、「小遣いがもうかりゃええで…、入れ」と。さっき言ったようなもんで、手に職をつけりゃーねえ。ははは。（笑）母ちゃん、ほういう言葉ばっかだったわ。

ほんで、パン屋の小僧とかね…。鍛冶屋行ったり、鉄工所へ行ったり…。そんで、そういうもん覚えて…、ほーやって腕をつけてねー。みんなほういう…、手に職をつけるというね…、うん。そういう人ばっかだっ

たな。
みんなあかんようになっちゃったもんでね。今の…、伝統のが、無くなっちゃったもんで…。唐紙や…、あかんで、のーなっちゃたし、建具屋ものうなっちゃったし…。みんな、のーなっちゃうわな。鍛冶屋さもありゃせんしねー。時計屋とかそういうもの、昔あっただ。あんたがた、わからんねー。うん。ほいでねー、全部ほういう…、手作業の、ええ仕事…、うん…。ずーっと、伝統のね…。みんなのーなっちゃったもんで。時代が変わっちゃったもんでね、うん…。

当時の高浜には「腕に職をつける」職人を目指す土壌があったのである。そしてその上に高浜が抱える独自の土壌、「鬼師の世界」が生活の中に存在していたのである。義照はそうした風土の中で、山本福光の鬼師、石川類次と出会ったのだ。

ここでいう「山本福光」とは山本福光を親方とする鬼板屋を指す。山本福光は特に鬼板屋の屋号は掲げていなかったのである。（高原2005）義照がこの山本福光に入った昭和27年（1952）の頃、山本福光にはすでに職人が4人いたという。いずれも明治生まれの人だったと義照は語っている。名前をたずねると義照は覚えていた。杉浦勇、杉浦周次、杉浦雄次、神谷豊国。

ほりゃー、皆腕があるわな。腕があるもんで職人やで。

ほんだで、何でも作れるってね、できるよ。みんな何でもできるんだけんど…。手間とっちゃお金にならへんし…。

あのー、だいたい農業やっとる人が多いだ。ほんで、家で農業やりながら、その間に来るとかね。忙しいときは、家のやらなかんで…。あの時代はみなほーやって生きとったでね。ほういう時代やったもんで、全然違う。

そうした中へ、義照は石川類次に誘（いざな）われて山本福光へ入ったのである。そして義照の後、さらに福井謙一がはいり、さらにそれから、神谷益生が入ってきたのである。そして石川類次は弟子親方として山本福光の仕事場で、杉浦義照、福井謙一、神谷益生の三人の鬼師を育て上げたのであった。この三人のうち福井謙一と神谷益生はやがて独立していき、それぞれの鬼板屋を始めたのである。ところが、杉浦義照は石川類次と終生仕事場を共にし、師弟関係を続けたのであった。類次が仕事場を去ったのは類次が88歳の時であった。

（昭和）27年に入ってねー、うん。ほれでー、4年ぐらいは（山本福光に）いたな。まあ、小僧みたいなことやっただな。食うついでにやらなかんもんだ。ほんで小さい奴からね。あのー、やれるもんから、みな。何でも…小さいもん。作れるもんからやってった。

義照は当時の頃を思い出しながら次のように小僧の始まりを語っている。

まあ、どいうふうってって…、さっき言ったようなもんで…、覚えてくもんだ。あのー、一年ぐらいはね。

「いかんぞ」って。ほういうことだわね。「こーやるぞ」って言って…。あのー、一番始めはね…。作ったとこを、こー、見させてくれて…。ほでー、自分が真似して…。ほーやってやるより他はないはなあ。

ほーより他ない。ほんで、皆のやつを見ながら…。

義照は「見て覚える」始まりを鮮明に覚えているのであった。鬼師になるための初期化がはっきりと心に刷り込まれているのが見える。義照は現在78歳なのであるが。

あれだね、ほのー、一年は、自分は…。「こうや」、「どうにか」、「こーやってやらなあかんでー」とか、ほういう言葉ばっかしだわなあ…。たまたま、ほれで…、あのー、入った最初の頃はやれんもんだ。ほんで、手に取って…。ほんで、こーやって、やっとるところを見て。ほんで、自分も真似して…。ほれが始まりだったのー。

ほん時は、やれんもんね。手が動かんし、ははは。（笑）ほれが始まりってことだ。

こうした状態から義照は鬼瓦を作り始め、やがて鬼瓦が手で実際に作れるようになっていったのである。

（テーブルを指しながら）鬼だね。昔こういうものがよく出たもんだ。うん。ほんで、こういう…、民家のやつをみんな作っとったもんだ。民家のやつを作って…。ほんで、まあ、3年、4年ぐらいたったら、まああれだね。3年か4年あいてからだな。経の巻とか、こういうものをね、作るようになってきたわな。

義照の鬼の修業に二つの転機があった。それを象徴する出来事が、「恵比寿大黒」と「観音像」である。義照がついて学んだ人は石川類次である。そして小僧の義照にやがて変化が起こるのである。

あのー、2年か3年。あー、3年たっとらんな。2年…か、そこらちょっと…。あの、ヘラがね、うん。ヘラが、ちょっと、という…。

むずかゆいような言い方だが、つまり、義照のヘラを持つ手が動き始めたのである。独特な感覚であったと思われる。そうした変化が現れた義照を見ていた類次は義照に次のように言ったのであった。

「恵比寿大黒作ってみよ」って言って…。ほーだで、昼飯の時間に、あのー、一つやって…。ほれで、こーやって、うちにあるけどね、出来たやつが。ほういうふうに、ほのー、手先のええところを見ようと思ったんやないかな。

義照は類次の「やってみろ」を受け、恵比寿大黒のモデルを目の前に据えて作ったのである。しかも、その最初の恵比寿大黒が今も「家（うち）にあるけどね」と言っている。鬼師義照の処女作とも言えよう。

ほりゃー、あのー、（恵比寿大黒が）あったもんだ。ほれを見てちょっと作っただけどね。

義照に恵比寿大黒が一つの転機になった出来事なのかとすぐに聞いてみた。返事は極めてはっきりしていた。

うん、そうだね。初はねー。ほりゃー、「作ってみよ」って言われたもんで。あのねー、こういうところ（類次は）聞いとっただ。「鳥かごも作るし、何でも学校時分にやったで…」って言って、ほういう話を聞いとるもんだ。で、家の、あのー、なんていう…、中に入った人がねー、あのー、類次さんと連れやったもんで。ほれで、さっきほういうことを…、なったんやないかなあと思う。話聞いとるもんだ。

うん、ほいで、まあ、結局ほういうことだな。手先を見たってことだな。まあ、俺が、

わしが思うとだよ、うん。

出来上がった恵比寿大黒を見て、師匠の類次は何か言われたのかと聞いた。

うーん。別に何とも言やへん。何とも言やへん。「できたかなー」って言うようなもんだ…。

恵比寿大黒の時は類次は特に言葉では表現せず、義照の手先を見たに過ぎなかった。しかし、観音様を作ったときは違っていた。なんと師匠の類次がほめたのである。

ほーでもね、あの、観音さん作ったときにねー、ほめてくれた。ほいで、ここへ（山本鬼瓦）来たばっかの頃だけどね。ほれで作っただ。

ほー言ったらね…、「おれもやったけどなあ、傷が出ちゃってなあ。バーンと切れちゃって…。ほーやって（傷が）入っとったわ。まあ、あかんようになっちゃったけど…」

「君はほいでも…、良かったなあ…」って言って…。

ほの時が初めて…。ほめたっていうやなくて、「良かったなあ」って言って…。
「お前、作って良かったなー」って言って…。

うん、（石川類次が）死ぬ前でも…、あれだね…、一週間前だったか、行ったら…、観音さんが飾ってあって、「君は良かったなあ」って言って…。（笑）

石川類次は観音像が好きだったらしく、今でも類次の息子の嫁にあたる石川ふさ子の家にはおじいさん（類次）の形見だといって、床の間に陶器でできた白い観音像が飾ってある。類次は気に入ったものがあると骨董の類を買って集めていたと石川ふさ子は話してくれた。

義照はさらに「見て覚える」記憶を呼び起こしていった。義照の技の磨き方の一端が語られていく。鬼師の姿が同時に立ち上がるのがわかる。

ほれから…、まあ、高浜…、これで、碧南もだけども…、鬼板屋がよけいあっただ。14、5軒あったな。わしらの若い頃は。ほで、6、7人がみなおったなー、職人さんが。

その、工場、工場で皆おった。こーやってね、精出してみなやっとったわ、うん。ほんで、ほーいうところへ、あのーたまたま顔出すもんだ。ついて行くもんだで、足でね。何かちょっと役があると、ほしたらほういうところへ話にいかなあかんやら。ほんで降ろしにね、行くわね。工場へ入らしてもらうと…。ほーすると、鬼を見るじゃん。ほんで、「ここの家はこういうもんが…、得意やなあー」とか、「よーできるなあー」とかって言ってね。ほういう、まあ、自然に目が肥えて来るってことだな。

見るもんだでね。要するに。うん。まあ、自然に、こうやって…、覚えてく、あれじゃない。うん。言ったって、ほんな、やれーへんし。ほれに、わからんもんだ。何も…ねえ。三日しゃべったってあかんわな。三日も四日もしゃべったって、糞のたれのように、ははは（笑）。うん、ほーだでね。自然に、ほのー、学校の勉強と違うだな。こういう仕事は。

ほりゃー、腕に覚え、身体で覚えていくでね。自分の身体がほういう風について行かんと…、物事はねー。次から次へと。

ここに義照は学校で話して、教えて、育てるやり方とは異なる世界について語っている。それが「見て覚える」であり、さらに踏み込むと、「見て盗む」鬼師の姿が見えてくる。では新しい何かを見たときにすぐに試すのかと問うと、義照は職人の在り方の厳しさを話すのであった。

まあ、言ったように、飯食ってかないかんもんだ。ほんなことやっとれんわな…。うん。注文が来やあ、やって、此処の家もやってかなあかんし。ほりゃー、「やだ」ってこと言わへんし。「はい、はい」ってやってかんと。何でも作ってやらんと、また食えへんもんでねー。

ほりゃ、あんたー、あれだよ、気に入られんと、「おれのやつはどこに行ったー。どこやー」って入ってくる人があるでね…。うちも…、ほんで、とんでもねえ奴作っとると、叱られちゃうわな。そんなもん、ね…。工場入って来て…、「おれのやつ、あらんでねえか」って言われてみいー。ほういうこともあるだでね。

だで、まあ、お得意さんをつかむってことは、何でも作ってあげんと。「ほらー」って言って、鼻ばっかあげて、自分の好きなものばっか作っとったら、ほんなもん、あかんもん。ほういう人からするとペケだな。ほういう職人…、ほういうのは職人やねーでな。ほういうわがまま勝手のね…。ほういう仕事だでね。ほういう…、あかんね、ほういう人は…。たまたまあるわ。ほういう人はね。ほりゃ、腕がいいって、すっと渡って、またよその工場行って、ええもん食って、親方としゃべってね。うん。昔の…、それだけの話だけど、近所でもあるもんだ。

「旅」（バンクモノ）

義照は高浜に鬼板屋ができて始まった定住型の職人について語っている。義照自身がまさにそうである。それと同時に、古い形の職人の在り方も語りながら、自分の師でもある石川類次を重ね合わせるのであった。

ほいで、親方が「来てくれよ、くれよ」って言って、事務所へ入って来た。「こういう仕事、まあ、じき来るで」。ほいで来るだ。ほーすると、ほこのー、工場でやっとる職人さん方は嫌うわな。ほいで入って来て、ついでに…、わしを怒ってくるで。ほいで、親方同士でしゃべってあるもんだ。ほで、また、ほういう人は、また、スッて消えてっちゃうでね。うん。ほういう人もあったらしい。うん、昔はね。

鼻上げてね、ほういう人はね。ほりゃ、つまらんわなあ。悪く言われて、ほりゃ、あんたねー、あのー自分の好きな物作って、うん。ほういう職人さんもあるだ。たまたまね。うん、だで、職人っていうのはほういうもんだよ。うん。気に入らんとパッとやめてっちゃう。

あの、昔、「旅」って言ってね…。今の石川さんなんかも旅、行っとらしたな。ほう、みんなヘラ持ってね。ほいで、あんた、旅、行かれとったわ。ほれから、旅から旅へと、だったわな。まあ、粘土の出るところなら、みんな…、瓦屋さんがあるもんだ。ほれで、ほういうところ行くとね、ほーすると、ほいで、家で、あれやな…。「仕事がまあまああるで、居ってくれんか」って言って…。ほいで、ほういう話を聞くもんだ。ほういうところでね。あのー、仕事やらしてもらって…、うん。あるうちはやって、うん。ほやもんで、明治の人はよっぽど行っとる。

うん。旅出てって。あの、ヘラとね…、ほれから…、叩きとか、あーいうものを持ってね。

石川類次は義照によく旅に出ていた頃のことを話していたという。いわゆるバンクモノのことである。「旅」と呼ばれていたことがわかる。

俺は、わしはいかんけどね。わしは。時代がかわっとるもんだ。ほういうこと出来んわな。出来んことはないけど、あのー、あれだね。

ほだほだ、「掛川の方へ行った」って言っとったな、石川さん。あっち行ったり、こっち行ったり。ほりゃー、仕事のーなるとまた変わらんといかんもんだね。

旅に行くと技術が上がってくるものかとすぐに聞いてみた。義照はそれに対して次のような答えをしたのである。

なんて言っていいかね。まあ、県、県、でね。だいたい東は東。ほれから、西は西。ほれから、細かく分けると県、県で鬼がね、変わって来るだわ。うちは、うち、こっちはこういう鬼って言って…。ほだでね、腕がよくなって行くってことより、ここ（頭）が回転ようなるってことだな。うん。

出て行くやで、腕は持っとるもんだー。うん。自信があるでやって行くわけだー。

つまり、旅に出ることで、県、県で変わっていく鬼をその都度、その変化に即応して作る力、ないし技量が要求されることになる。それに対応できることが旅職人に課せられる試練といえよう。

あのー、立派なものあるけんどね。うん。みな、あの、県、県でね。あの、また西の方行きゃー西の方で…、鬼が違うしね。ほいで、ほういうところ行くと、やっぱ、ほこの、この鬼（テーブルにあった）を持ってってね…。「いかん」って言うわね、うん。ほりゃ、嫌がるだ。ほだで、ほーいうもの…、作ってかないかんわね。うん。嫌なもんあげとったら困っちゃう。

今はほうじゃないよ。まあ、今は無茶苦茶になっちゃったな。ほりゃ、プレスで、ガシャン、ガシャン、ガシャン…。まあ、ほんとに困っとるわ。30、まあ30年前からね、無茶苦茶に。もっと前か、出来始めちゃったわ。クシャクシャやもんね。あんなん二束三文だわ。

参っちゃうわねー。手にかけんようなものやで。これも、今、白地が来とるんだけども、プレスみな抜いて、手間かけてみな難儀してやっとったものをねえ。カチャ、カチャ、カチャとやっちゃうもんねえ。

「旅」から「プレス」へと移った昔と今は、各々の県にあった独自の地域色豊かな鬼の流儀が、同じ金型でできた鬼の大量生産によって消えて行ったことになる。義照はその二つの極の狭間を生きて来たのであった。

あー、だんだん薄くなったな。ほいつは言えるな。ほんな、一本打ってやっとるもんだ。どんどん、あんた、プレスでねえー。みな、だからガバガバ儲けちゃったわな。まあ、今はあれぐらいしか売れーへん。だで、ええ時がありゃー、こういうふうになる。

みんな、ほのー、伝統っていうもの…、こういう手に職の、職がなかなかんようなそ

ういう…、んーてね。細かいことやって、初めて、ほのねー、人間が見て、「ええな」って、皆が見て、「ええな」という、ほういう仕事が全部のーなったてこと。

このように今とは対照的に昔はそもそも旅職人をする土壌が高浜にあったことを義照は語っている。それは土地が育んだ独特な伝統文化を擁していたのである。そうした土壌に支えられてバンクモノが存在していたことになる。

ほいでね、わしがたね、時間が決まっとらへんもんだ。だいたい一個…、作るといくらって、昔…、ほういうやり方でやったもんで。うん。時間やなんか…、関係ない。いつ…、遅く来てもいい。早く帰ってもいい。ほれから…、入って…。ほういうあれがあるだ。ほりゃ、仕事によっちゃー、やらないかんという仕事があるもんだ…、まあね。

ほでー、だいたい夕方までやって、ほれから…、相撲が見たかったもんで、早よ終わってとか…。（笑）

つまり昔は農業をやりながらその合間、合間に鬼瓦を鬼師は鬼板屋で作っていたし、またそれができたのである。さらに進むと、鬼瓦を作るための鬼板屋が特定の決まった鬼板屋である必要もないとなると、その先にあるのは「旅」をする職人の姿だったのである。

ほーだ、ほーだ。ほれでさっき言ったように…、これ（腕）さえありゃー、な。あのー、鬼板屋、どこでも、自分、行けるもんだ。

そー、それで昔、旅職人というのが…。

すなわち仕事があるところへ、「腕に職を持つ」職人は出かけて行ったのである。また義照の母がいつも言っていたように「腕に職をつける」ことが生活をする上での必要事項だったのである。

まあ昔は何でもほーいって…、窯築きっていって、窯やなんか作る人があったんやな…。泥でこうやって…。その人方が皆「旅」へ行ってね。うん、ほういう話聞いたことあるな、わし。ほれで…、あの土の出るとこ、みな窯屋さんがあるもんだ。ほれで、ほんで、ほーやって…。窯をね、熱するようなところで…。ほれでね、十日なり、とかね、二週間とか、仕事があるもんで。

ほれで…、旅から旅へ回って…、ね。農家やっとる人は、ほういう人多かったよ。うん、昔は何でも、ある程度…。ほーやってね。自分で、あのー、ほれもあんた、何にも知らんとやれんもんだ。ある程度ね、ねー、親方というものがあって、それについて…。うん、ほーやって…、昔は…、碧南もほーやけど、来よったけんどね…。

義照の場合はそのついた親方が石川類次だったのである。ただ義照は「旅」はしていない。時代の狭間にいたからであった。

大事な人ってって、わしの今おるんは、類次さんのあれだと思うわな。類次さんには、みんな、皆さんのな…。みんな、ほーで、ほーで、仕事をね、見たりしてやってきた…。（図１参照）

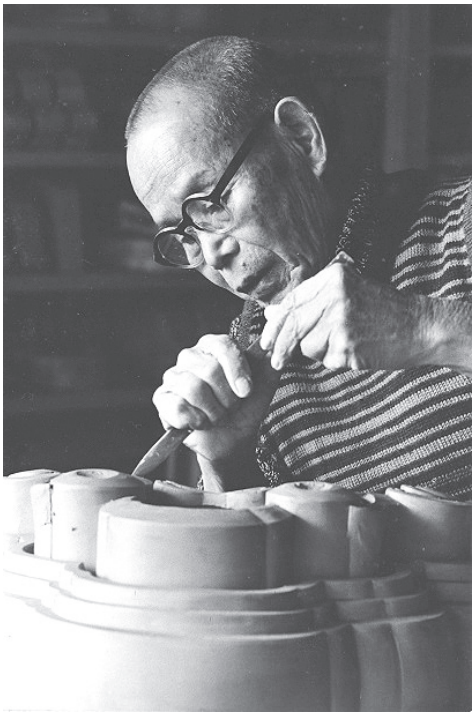

図１ 石川類次　鬼瓦を作る

見て覚える

そしてここから親方から弟子への技の伝授について「見て覚えよ」を中心に義照は話している。「見て盗む」に近かったのかとたずねたことから話が始まった。

まあ、ほういうことだね。まあいっしょやない。ほういうことは…。うん。あのー、自然とほーなって行くわね。見て、覚えて、ある程度…。あー、ここら辺は上手にやっとるなと。いい具合やなーと思ったら、マネするってことはいいことだもんで。ほーやって…。

良いところに気付くことが大切なんですねえというと、すぐに義照は言葉をつないでいった。

そ、そ、そ、そ。ポイントだけんど…。ほれで…、まああれだね…。ポイントもほーだけんど、自然になって行くことだな。さっき言ったように。言ったって…、言ったってね。うん、学校の勉強と違うもんだ。ほれで…、先生が一は幾つ…、だって…。ほういうのじゃないで。うん。

ほだで、割り切っても割り切れんところはあるなー。うん。こー、ものを作るということは、もっと上があるもんだ。上があるもんで…。ほやでねー、これでいいってことは絶対ない。やってるうちゃ、あいつはなあ、自分がええとこ出さあと思ったら、自然に頭に浮かび、出てくるようになるには、さっき言ったもんで…、身体で覚えてかにゃ…。太鼓叩くでもほだ。リズムでも。あーいうことを…。やっぱり自然にねー。何でも、ピアノでも一緒だわ。ベートーベンだか、あーいうものでも一緒だわ。一緒やけんど、自然にねー、身体で覚えていく

ということ。やれったって手が、身体が動かにゃー。手が…、身体が出てくるもんでね。石頭になっとっちゃあかんのだ。ほだで身体で覚えていかにゃー。ほれで、あーせよ、こーせよってね…。まあ、ものを作るというのはほういうものやない。どんな仕事でも、うん。ほだでなー、教えてもらうってことは、やっぱり、ほのー、ある程度基本だな。基本ていうことはあるけんど…。ほれをちょっとな。うん。あのー、こーやってやれ、あーやってやれ…、って、ほやってね…。まー、それがあれだわな、うん。

類次と義照

石川類次は杉浦義照、福井謙一、神谷益生の三人の鬼師を育て上げた。しかし、福井と神谷はやがて独立し、親方になりそれぞれ鬼板屋を興していった。ところが義照は類次が88歳で山本鬼瓦を去るまで、師の類次と同じ仕事場で鬼を作り続けたのである。師と弟子の関係をなす二人の職人は類次が長生きでしかも現役の鬼師であり続けたことにより、独自の技の伝承が起こったのである。鬼師は一般的には長命の傾向がある。一般の人が現在60歳で現役を降りることを思うと、一生現役の感がある。その中でも石川類次は突出している。その類次に長く連れ添うことができた義照はある意味運が良かったといえよう。

うん、ほれね、まー…、入っとるわな。あのー、(88歳まで)おられたって…、あれだな。ね、昔やなんかはあれだな。3年…、年があくとみんなかわるだ。ほで、工場へ入ってく…。ほういう人があるだわ。かわって、すっと…。

つまり、見習いの小僧から3、4年たって職人になると鬼板屋を次々と変わる鬼師が多かったのである。類次と義照の関係が異色であることが見えてくる。

そうそう、あのー、鬼板屋さんでも、何軒かあったもんでね。「ちょっとあそこはお金がええ」って言って…。ほすると、「ほいじゃー行くか」って言って、よくよく行っとったな。うんで、「うちを変わるか」って言って…ね。そういう出入りがものすごくあったわ。

うん。んで、ほいでねー、段々だんだん職人さんも、のーなって来たし。あのー、まあ、なんて言ってもこいつの(金)のことでね…。うん、ほいで、電車でかよわーと、碧南まで。ほれから、で、あのー通い賃つうものをくれるとかー。ほいじゃあ行くかってねー。ほういう人はあるし。いろいろあっただ。ほれから…、足代を…、割にある程度くれるって言ってね。ほんだもんで、ほういうところ行くし…。

なぜ義照が山本鬼瓦の類次のもとにずっといたのかたずねてみた。よほどの相性のいい師弟関係だったことがうかがえる。

ほりゃ、まーあれだね…。ずっとおられたっていえるのは…、あれだね…。自分が気に入っとるんだな…。うん。うちの…、みんな分からんしね、作っとるけど。何にもできんだもんだ、うん。ほやで…、あれだね…。言葉も少ないし…。ほれだけどさっき言ったように、そのー、あれから…、20…、何十年とって付き合ってきて、私がずっとね…。あの…、あるたびに…、ほういう仕事をやらしてもらえるだでね。うん。何でも作ってあげんといかんということだね。そういうことだな。

類次と義照は同じ仕事場で、何十年と仕事を共にしてきているので、類次から何か鬼瓦に

図２ 石川類次　ヘラを持つ手

関して言われたことで心に残っている言葉を教えてほしいと聞いたところ、なんと返ってきたのは「見て覚える」世界の繰り返しであった。

さっき言ったもんで…。あのー…、あれだね…。まあ、おたくが、言って…、「今から、こーやってやれ」って言ったって何もできへん。やったこともないし、土いじったこともない。

（笑）だからこーやって…、手で…、やってくれて…、ほーすると、わしは見とるだ。見とって…、「やってみよ」ってって…。これが始まりだったな、うん。ほんだけんのことだわね。うん。ほいで…、作るものがだんだん変わって来るもんだ。ほやけどやり方は一緒やもんで…。

うん。ほやって…、自分ではやってくってことだわな。で、さっき言ったもんで…、自然に…、「ほれやれ、あーやれ」ったって…。まんだねー。さっき言っとったもんで、ヘラも使やーへんし…、ねえ。何にもやれん。やれーへんだもんだ。ほれで、自然にやれるようになって来るだもんだ。ほれが…、うん。ほだで、わしが若い頃は、いろいろ言われるけどね…。あのー、ほりゃー、ヘラ持ったって…、手が震えてくるで、やれーへんだもんで…。ははは。（笑）動かんしね、うん。ほだで自然に…、何でも覚えていくんやない。覚えるというのは…。（図２参照）

このように義照が話すので、義照が作るとき、類次は何か言うのかと聞いたところ、たとえば「こーしたらいい」とかと。

まあ、ほんなことは、ある程度…、ここ来てから（山本鬼瓦）ほとんど、まーほういうことしゃべらんかったな。

図３ 石川類次　盆栽の手入れ

つまり言葉で教えることはまずなく、鬼を作るときはほぼ無言なのである。ただ作った鬼の乾燥については短い言葉による指示はあったという。

ほのー、３年、２年か３年の間は…、「やー、ほーやってくるくる回さないかんで」とか、ほういうことまで全部ね。切れちゃうで…。ほんで「日に当たって良く乾いて…」、「日陰は乾かんで…」、「あれ直さなあかん」とか…、そういう…まあ細かいことを言うと、ほういうことだけんどね。

類次は仕事場では仕事に関しては言葉は少なかったが、家庭での愚痴のたぐいは義照に時々漏らしていたという。逆に言うと類次は義照を信頼しており、仲が良かったのである。実際、仕事場以外でも類次と付き合いがあった。類次は義照をかわいがったのである。

うん。ほのころは、まあ、まんだわしが来たばっかの頃だ。わしが小僧になっとった…頃だな。うん。小僧の頃だわ。あのー、うん。ポンポン蒸気でよー、行きよって…。鬼の仕事が終わって…。うん、ほだ、ほだ。んで、日曜日なんかあるもんだ。ね。まあ、山ばっかやったでな…。亀崎と半田の…、あのー、まあ、町のあたりとか、ほんとに…。全部あれだな…、周りも、いまみんな…、民家出来ちゃったもんな…。住宅からみんなできちゃったもんな…。まあ、えらい変わり、…出来ちゃったなで。そこを通るとね…。そういうことを思うけんど…。うん。まあ、時代が変わればしょうがないな、うん。変わっちゃったもんで…。

あの…、趣味がな、だいたいわしもほういうことが好きだし…。あのー…、好きだったもんだ。ほいで、ほんだもんで…、「盆栽やるかなー」って言って…、で盆栽…。(図３参照)

さっき言ったようなもんで…、まだ亀崎行くには、まだ、あんた…。橋もあらへんもんだ。ポンポン蒸気でね。

このように義照は師の類次から鬼に関することだけでなく、様々な趣味を含めた素養を小僧の頃から総合的に身に着けて行ったことが見えてくる。類次は義照の文字通りの師匠であった。義照は事実次のように類次について述べている。

ほりゃー…、頭は切れたな。頭が切れた人だったな…。ほりゃー利口な人だったな…。なんかよー知っとらしたな。うん。ほれで…、ほんとに利口な人だったな…。

流儀

少し前に義照は県と県との間に鬼瓦の違い

が土地の違い、文化の違いとしてあることを指摘していたが、個人と個人の間にも鬼瓦の作り方において違いが存在することを指摘している。その違いを鬼師は流儀と呼ぶ。各鬼板屋の間にも流儀の違いが存在する。義照はその同じ鬼板屋の中でもさらに個人、個人の間に流儀があるというのだ。つまりたとえ師は同じでもその弟子たちは自分なりの流儀を身に着けていくことになる。

ほいでね…、流儀ってってね…、みんなお得意があるだ。自分の…、流儀ってもんができるだわ。うん。だでねー、教えてもらってその通りのようなことをやるってこともあるけんど、うん。流儀ってもんがあるだ。やっぱし、自分の…、皆ほーだな、考え方が違うだら。

ほーやると、ちょっとこーやると、また、あのー、何ていうだな…、勢いがあって良くなるとか、彫りが深いだとか…、彫りがね。えらい変わって来るもんだ。仕事が変わって来るもんだ。

ほれからよー、あれだね…。ほれだけのことだわな。ほういうふうに、あのー、流儀ってもんがやっぱしね…。みんな顔が違う通り。あのー、思ってることも違うし、手出てくるとこが違うでね。ほれが難しいとこだわな、うん。

図4 杉浦義照　獅子制作中

それぞれの個性がちょうど性格や顔立ちの違いとして現れるように、鬼師の場合は流儀となって自然に、鬼師が作る鬼瓦に表れてくるのである。一人として師そのものにはならないことになる。伝統の技を受け継ぎながら、同時に作り手の個性を加えながら創造していることになる。伝承と創造が鬼師が持つヘラ先に交叉するのである。古(いにしえ)の伝統が今、ここに立つ鬼師の鬼師のヘラ先に新たな生命と

なって甦り、土の塊に個性を吹き込むのだ。鬼の誕生である。義照は流儀をさらに詰めて話す。

ほだで同じまねでね…。真似だけど、マネしちゃ、たるいはなあ。自分の流儀ってもんをやっぱり生かしてかな…。俺はこういうところはちょっとええだとかな。ほれがねー、やっぱしある程度の…、年数やっとるとね…、手数かけて仕事やってると、自然にね、身体に自分のこういうところがついてくるんやない。うん、…と思うがね。俺は俺の流儀があると、うん。(図４参照)

自分の流儀に目覚める、ないしは、気づくのはやはり作る（創る）ことによってであった。

作るもんによって…、あの…、何ていったらええかね…。向こうから来やー、向こうの古い奴（鬼瓦）が来や、「こうこう、こーやってね」って…。全然わしは「こーやった方がええなー」って。こういうふうに言われや、こういうふうに言われや、こういうふうにやってあげんといかんもんだ、ある程度…、ね。まあ、言われたようにある程度やって行かならない。言われるたびに、こーやって、まーやって、こーやった方がいいなって…。ほんで、これを見た時も同じ…。片っぽ、あの…、あれだね…、開いとるのと、片方…、なんでやっとる、逆に…。

作るには、「あー、ここにつぼみがほしいな」とか…、ねー。「ここに葉が、まあ一つあると、まっと立派になるな」とか…。「横へ葉を作ったら立派になる」…とかね。ほやけんど、自分の流儀を出そうと思ったって、こー言われることあるで作ってあげなかんやらね。で、出んわな。ほやけんどいいところを出してあげんといかんもんでねー。うん。ちょっといいところ出していかなかんで…。

義照は流儀とも美意識ともいえる、上を目指す職人意識を明白に語るのであった。

ちょっといかんと思ったら、ちょっとこー

図５ 鬼面唐破風鬼　豊明市曹源寺　杉浦義照作（平成１０年頃）

図６ 本鬼面足付鬼　豊明市曹源寺　杉浦義照作（平成１０年頃）

いかんなーと思ったら、こーして、あーやって。物事には何でもそっくりということは、たりーわ。ちょっと変えるとか、ねー。ほりゃ、写し紙と一緒になっちゃうだ、ね。ほやで、あかんでしょう。みんなプレスになっちゃって…。手で作ったものの価値がのーなっちゃうで…。うん。ほーやけんど、こういうので来とるもんだ。残してあげな。お先祖のやつはね…、わしら寂しいけどね…。

義照は流儀の大切さを語りつつ、いわゆる復元ものといわれる鬼瓦との対話についても語るのであった。古き伝統が現代の鬼師の心の中に蘇るのだ。

ほーだもんで、こーいうの作ってると、「あー、昔の人はよー考えてやったもんだなあー」と、ね。自分のやっとると…、うん。作っとると…、ほいつが頭に浮かんでくるわな、うん。ほりゃ何百年と（屋根に）上がっとるでね…。ほだから何でもねー、作った人のことが…。

うーん。ほの、これを作った人が、ほれが浮かんで来るわな。「こういう…、仕事しなさったなー」って言って…。

ちょうどあたかもCDやDVDで聴いたり、見たりするように、鬼瓦は伝統の記憶のメディアなのである。実際にヘラを持って、古の鬼を復元するとき、その鬼瓦を昔作った鬼師が現代の鬼師の心のモニターに立ち上がるのだ。腕のある鬼師はその鬼師の流儀を読み、対話することになる。義照の流儀の話は続く。

同じようだけんど…。（笑）皆その人によって…、さっき言ったもんだ。流儀があるもんだ…。ね。皆ほーやって、昔も今でもほーやけんど…。あのー、覚えるときはねー、親方にある程度何して…、ほーやってやってくんだけど…。同じ弟子でも、ほこのうちで二人か三人もできても、同じ出来るような仕事をするって人はまーおそらくないわな。

だからさっき言ったように、流儀ってもんが、皆、自分の…、俺はこうだ、こうだってって出てくるね。うん。似とるけんど…、違ってくるわね。うん。ほいつははっきり言える。（図５、６参照）

ほやで、あんた…、顔が違う通りの…、まあ、わしらではそういう事は言うけんど、ねー。しゃべることでも、あのー、中のあれだね…。頭脳の動き方がね、変わって来るでねー。ちょっとねー。ちょっとのせると、のせると、「おれはこういうふうだ」って言って…、白い人は黒い、ね。黒いといやー、白いとね…。皆ほいで、ある程度あの、窯を入れるとね、やっぱり違ってくるだ。（笑）

最期に、鬼師としての職人が持つ独特な習性を紹介したい。立ち続けて行う職人が織りなすユニークな姿である。

半日、あんた三時間半か四時間立っとてみー。おしっこ行くと、ああ、いいなあって言って。んもんだ。立っとるのもものすごいえらいでね。うん。頭使って、神経使っとるもんでね。わしの、小僧…、昔の小僧の時は、あのー、石川さんが、便所いかさると、ほーすると、「ああ、ええな」と思って、ほんで後から、ほいてから便所へ行く…。それがね、えらい楽しみにしとったわけよ。ほれぐらいやったよ。細かいことまで言うと、うん。

ほれぐらいえらいだわ。立って仕上げ等をこうやってやっとるだら。ほれと、石川さんが行かさると、後からね、やっとるわけだ。ほれはー、うん。喜びだった。まあ、悪いこと話すと、ほういうことが、今話すと、今の若い奴も一緒だね。一人行くとまた後からついて行く。（笑）ほたら、あんたー、抜けるもんだ、場から抜ける。

親方が出て行くと、誰かが抜けると、ほーやって便所走って行くね。（笑）

それほど仕事場で立ち続けた姿勢で張りつめてやっているのが鬼師なのである。何度となく見た姿であるが、「する」と「見る」とでは大違いなのがここに語られている。

図７ 山本鬼瓦 工場（こうば）（中央の建物）

そういう事だよ。ほういう事がねー、あのー、何ていうのかな、ほで、身について行くじゃない、人間。何でも仕事が、うん。ほで、えらい、えらいって言って…。お疲れさん。ははは。（笑）

ほりゃあんたー、ほりゃ、場から出れるもんだ。立ってこうやって並んでずっとやっとるとなかなか大変だよ。ほれでも石川さん…、類次さんがおった頃には、二人でやっとったけんども。ほんであんた…、これであんたー、一人、二人、三人、四人か。あ、六人おるな。若いもんが六人くらいおって、並んでこーやってやっとるもんだ。ほれであいつら、一人動き出すと、また次からこっちと動くね。ははは。（笑）ほで、あんたー、楽しみやったわな。うん。「あー」って気が抜けるもんで、ねー。そんな事だよ。

まとめ

山本鬼瓦の鬼瓦職人、杉浦義照のインタビューを中心に鬼師の姿をできる限りリアルに描いてみた。インタビューは2015年11月13日に山本鬼瓦にある工場の右手一階奥にある義照の専用の仕事場で行った。（図７参照）現在、義照は広い仕事場を基本一人で使って仕事をしている。他の職人たちからは無口な、無愛想な、変わった鬼師として知られている。しかし、同時にある種の畏怖の念を抱かせる凄腕の鬼師でもある。二人目の鬼師として次に紹介する日栄富夫は同じ職場にいながら、次のように言っていた。「おそらく、僕がここに入って22年なんですけど、22年の間に交わした会話の量よりも今日、先生が話した時間の方が何倍も長いと思います」。今回のインタビュー以外にも、義照とは何度かすでに会って話をしたことはあったが、どちらかというと、とっつきにくい印象が少しあった。ところがいざ仕事場で義照と話を始めると、心配な自分を吹き消すように、次々と興味深い話を率直に語ってくれたのである。これで鬼瓦職人の姿が描けると工場を出た時に思ったものである。また義照は師の石川類次と何十年にもわたって同じ仕事場で鬼を作ってきたこともあって、長く不明だった石川類次の職人姿が同時に明瞭な形を伴って現れてきたのも大きな成果である。それは鬼師への道の師弟関係を通して伝統の継承がいかに行われるのかの解明につながっている。義照の心から協力に謝意をここに表したい。長く探していた石川類次をやっと見つけたといった感覚がある。また鬼板屋の親方が語る鬼師の世界とはまた違う角度から鬼師の世界が浮き上がってきたことは疑いようがない。鬼師という職人と鬼師という親方とが交わりながら、鬼瓦の伝統が今日に伝えられているのである。

参考文献

高原　隆　2005年「鬼師の世界―黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明 21』第15号：183 － 208

高原　隆　2006年「鬼師の世界―黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明 21』第16号：93 － 116